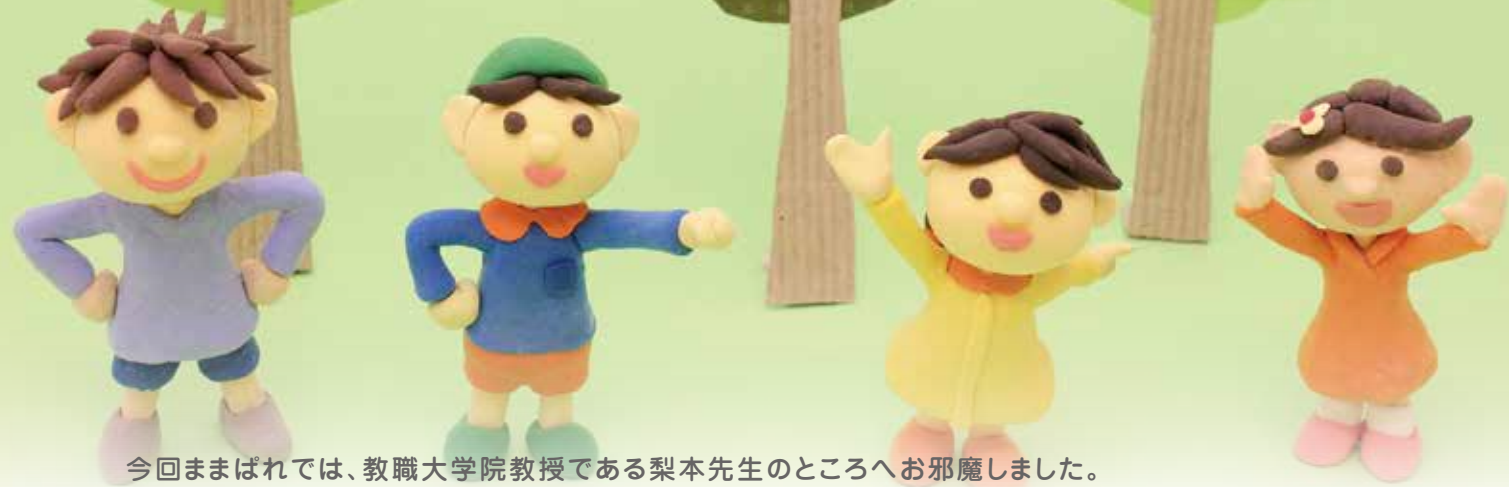


大事なのは、 目の前の教科書より、 勉強したいと思わせる環境



今回まばねでは、教職大学院教授である梨本先生のところへお邪魔しました。学童保育、託児所、子育ての手助けとなる場が増えているのは、現代が子育てしにくい環境にあるからこそ、と先生は言います。これからの教育の在り方について、お話を伺いました。

大切なのは、体験と人との関わり

—まずご専門についてお聞きします。

私の専門である社会教育は、教育といっても、学校の中で子どもを相手にすることではありません。子どもが学校以外の様々な場所で学ぶことや、大人が学ぶことを支援する営みを含む幅広い領域です。

大人が学ぶという場合には仕事関係ももちろん重要ですが、趣味・教養やスポーツなど自分の好きなことを楽しんだり深めたりすることや、身のまわりの課題を解決するために情報を集めて考え、さまざまな知恵を身につけていくことなどもあります。

具体的な例をあげると、公民館という施設があります。誰でも自由に部屋や設備を利用して活動することができますし、講座に参加することもできます。全国のほとんどの地域にあります。仙台では「市民センター」と呼ばれています。

また、博物館も社会教育のための施設とされています。ここでいう博物館は、美術館・

科学館・動物園なども含まれます。普段そういうところでは教育なんて考えず、単に絵や動物が好きで見に行くでしょう。図書館を利用する時だって、知識を身につけるための読書が目的とは限らず、好きな本を楽しむだけのことも多いですが、それでいいのです。

子どもも大人も、自分の好きなものに触れたり、人と一緒に楽しんだりすることが、いつか新しいことに興味をもったり、気づいたりすることのきっかけになる。学びの芽が育っているのだと思っています。

—「放課後子ども教室」というものもありますね。

放課後や休日に子どもたちが有意義に過ごせる機会をつくらうと平成19年度から文部科学省が進めている取り組みで、全国に約1万か所ほどの活動があります。小学校の空いている教室を使って地域の方からいろいろなことを教えてもらったり、校庭や体育館で



スポーツをやったりと、活動内容は地域によってさまざまです。大人が見守る中で、子どもたちがのびのびと安心して活動できるし、人と関わりながら多様な経験ができるというわけです。

—児童館とはどう違うのでしょうか。

児童館は児童厚生施設と呼ばれ、遊びの中で健康増進や情操を豊かにすることを目的とする福祉施設です。指導員と呼ばれるスタッフを中心に、親子のふれ合い活動を行ったり、子育ての悩みの相談への対応、母親クラブと呼ばれるお母さんたちの交流のための組織をつくらっています。

放課後子ども教室は制度上は教育のための活動と位置づけられています。ただ、教育といっても、子どもが自由に遊び、人と関わりながらいろいろなことを学んでいくという意味ですから、活動そのものは児童館とあまり変わらないともいえます。

見せるのはゴールではなく、スタート地点。

自分から学びたいと思わせる

きっかけを作ってあげよう。

—費用はかかりますか。

児童館を使って自由に遊ぶ場合も、放課後子ども教室に参加する場合も、基本的にはお金はかかりません。少額の保険料や、物を作ったり飲食をする場合の実費がかかるくらいでしょうか。

ただ、同じ児童館のサービスでも、いわゆる学童保育については毎月の保育料がかかりますよね。こちらは共働きや1人親家庭の子どもたちが毎日決まって放課後を過ごすもので、参加も自由な放課後子ども教室とは違います。

来年4月からは子ども・子育て支援の新制度が動きだすこととなります。待機児童の解消や学童保育の対象年齢の拡大がねらいですが、上に述べた学童保育と放課後子ども教室との関係も変わろうとしています。単に安い金額で子どもを預ければいいと考えるのではなく、子どもの成長・発達のために何が重要なのか、多くの人に関心をもってもらいたいと思います。

—子どもたちの反応は？

放課後子ども教室などの活動への参加のしかたはさまざまです。仲良しのお友達とただ話したり一緒にいることが楽しいというケース。自分の好きなスポーツや音楽などの活動ができるのを楽しみにするケース。大学生のボランティアなど、ふだんは関わることのない大人と会うのを楽しみにしている子どももいるようです。

最近はゲームなど1人だけでも楽しく遊べる道具がありますし、習い事など子どもも忙しくなっています。一緒に遊ぶ子どものグループの規模が小さくなり、年上の子と遊ぶ機会も少ないためか、人と関わりながら遊ぶのが苦手な子どもが増えてきています。そういう時に大人がつなぎ役となることで、子ども同士の関係ができて活発な遊びができる場合もあります。

放課後子ども教室は教育目的の活動ですが、学校のように特定の知識や技能を身につけるといいうねらいが強い活動ではないのが特徴です。子どもたちはあくまでも自分が好きなことをするために自由に活動に参加しているわけで、そうした活動の中で新しいことに興味をもったり、人と関わる力を身につけたり、自分自身を見つめ直したりということが成長の糧になると思います。

—先生が今後目指す社会とは。

東日本大震災の経験を経て、私たちは一人ひとりがお互いに助け合い、支えあうことができる市民の力の大切さを学びました。一方、政治や行政、マスメディア、専門家にすべてを「お任せ」にしたままでよいのかどうか、多くの疑問が生じたのではないのでしょうか。

生活者一人ひとりの力を生かした新しい社会をつくっていくためには、まずは子どもも大人もさまざまなことに関心をもち、学んだうえで自分の意見をもつことが重要です。少数の人だけが動かす社会ではなく、すべての人が主人公になれるような社会をつくっていく。生涯学習とは、そのような社会をつくるための基礎となるインフラなのです。

学校や仕事に関わる学習は、誰かから「やれ」と言われたことに従うというイメージが強いのですが、それだけではつまらないですね。自分の好きなことを追求し、仲間との関わりを深めたり、身のまわりの課題を解決したりできるような学びができる社会であってほしいです。

—最後にまばね読者にアドバイスを。

子育ては自分の経験でも悩みばかりで、アドバイスなどとてもできません(笑)。

ただ、生涯学習という観点から見ると、子どものテストの点数とか目先のことに、一喜一憂しないであげてほしいんです。確かに悪いより良いに越したことはないのですが、テ



ストの点数は子どもの能力の一部しか表していないものです。点数以外にもあるはずの良いところに目を向けて、ほめて伸ばしてほしいのです。

今の世の中は変化が激しいので、子どもの頃に身につけたことだけでは、大人になった頃には通用しません。生涯にわたって絶えず学ばなければ、仕事にしても生活にしても、やっていけないのです。そうだとすると、子どもの頃に重要なのは生涯学習続けるための基礎をつくることです。無理にイヤイヤ勉強させられていると、勉強そのものが嫌いになってしまうので、長い目で見るとよくありません。

学ぶということが好きになるためには、教科書や問題集だけの勉強でなく、もっと多様な経験をすることが効果的です。たとえば博物館や美術館で本物を見ると、やっぱり写真とは迫力が違いますよね。そこで「うわー！」と感動することが、もっと知りたい、やってみようという意欲につながります。また、さまざまな大人と出会い関わる経験をすることで、子どもは「こんな仕事につきたい」「こんな大人になりたい」と考える機会になります。何より親自身が日々の生活の中でいろいろなことに関心をもち、真剣に学ぶ姿勢を見せることが、子どもにとってとてもよい刺激になると思います。ぜひ幅広く長い目で子どもの成長をとらえてあげてください。

宮城教育大学
梨本 雄太郎 先生

宮城教育大学 教職大学院教授。
専門は社会教育、生涯学習。
市民の力を生かした社会をつくるためには誰もが自由に
学べる環境が必要と考え、この道を選択。一児の父。